

「シンポジウム」

台湾史研究者にとっての台湾総督府文書の意義

——台湾先住民史研究にそくして——

松 田 京 子

パネルディスカッション「台湾史研究の総括と今後の課題」において、私に与えられた「台湾史研究者にとっての台湾総督府文書の意義」というテーマについて、これまで携わってきた台湾先住民史研究にそくして報告したい。まず、どのような研究上の関心から台湾総督府文書に向き合ってきたかについて、私の研究主題と台湾との関連について述べることから始めたい。

私は、これまで日本が植民地支配を行う「帝国」となっていく動向のなかで、日本「内地」において、植民地としての台湾、そしてそこに住む人々、特に台湾先住民に対する認識枠組がどのように形作られていくのかを、主に「展示」表象を中心的な素材として考察し、著書『帝国の視線 博覧会と異文化表象』（吉川弘文館、二〇〇三年）などとして発表してきた。さらに植民地統治期の台湾先住民政策に焦点をあて、統治実践の具体像とそこに通底する思考を、植民地統治初期から一九三〇年代後半までを通史的に考察し、著書『帝国の思考 日本「帝国」と台湾

原住民 『(有志舎、二〇一四年)』 などとして発表してきた。

このような関心のもと、植民地統治期の台湾先住民研究を進めてきたが、歴史的な観点からの当該期の台湾先住民研究に不可欠な一次資料は、かなり限定されているといつてよい。台湾先住民はもともと絵文字以外の固有の文字をもたず、「文字」としては「日本語」が、植民地統治期に段階的に台湾先住民社会に浸透していったという状況も相まって、現在まで残されている文献資料は、その圧倒的多数が統治サイド、植民者サイドの資料であるといえる。

そのような資料の代表的なものとしては、『理蕃誌稿』『台北州理蕃誌』『理蕃の友』をはじめとする台湾総督府、地方行政機関からの刊行物、『台湾蕃人事情』をはじめとする各種調査報告、『台湾日田新報』等の新聞、『台湾時報』等の雑誌に掲載された関連記事などが挙げられ、植民地統治期の台湾先住民史研究は、これらの資料にかなり依拠しながら進められてきたといえる。

しかし、台湾総督府文書の中には、台湾先住民に関する、まだあまり分析が進んでいない膨大な資料が存在する。その一例が、台湾総督府公文類纂の中に一五〇件以上綴られた「撫墾署事務報告」である。一八九六年四月、台湾先住民施策の実行を担う専従機関として、台湾総督府民政局殖産部のもと、台湾全島に一一の撫墾署が設置された。一八九七年五月以降、撫墾署は各県知事・庁長の指揮下に置かれることになるが、一八九八年六月まで存続した。「撫墾署事務報告」とは、各撫墾署から提出された毎月の報告であり、その内容は各撫墾署が管区内の台湾先住民社会の状況について、その時々の特記事項なども含めて記した詳細な記録であるといえる。

さらに、この撫墾署が廃止されると、台湾各地の台湾先住民に関する担当部署は、各県各庁の弁務署に引き継がれることとなるが、一九〇一年一月の「地方官官制改正」によって弁務署が廃止されるまでの間、各県各庁より

「蕃人蕃地に関する事務及び情況報告」(弁務署報告)が月毎に出されており、台湾総督府公文類纂に編綴されたこの報告は一〇〇件以上にのぼる。この「蕃人蕃地に関する事務及び情況報告」は、弁務署ことに所轄の台湾先住民社会の状況を、生業のあり方や、交易の状況、弁務署との関係などそれぞれの地域の特徴も含めて詳細に記録したものであるといえる。

内容的にこのような特徴をもち、さらに量的にもかなり充実した「撫墾署事務報告」および「蕃人蕃地に関する事務及び情況報告」(弁務署報告)の詳細な分析とさらなる活用は、植民地統治初期の台湾先住民史研究を大きく進展させる可能性があると考ええる。例えば、植民地政府による当該期の台湾先住民施策の実施状況や、それに対する先住民社会の反応のあり方に、より具体的、立体的に迫れる可能性があると思われる。また例えば、樟脳生産と台湾先住民社会の具体的な関係性の解明など、植民地政府による統治初期の「山地」(「蕃地」)経営に関する研究を、さらに深化させる可能性があるともいえる。

今回のパネルディスカッションの統一テーマ「台湾史研究の総括と今後の課題」に引きつけていえば、これまで何度も強調されてきたことであるが、今後の課題としても、今一度確認しておきたいことは、このような充実した内容をもつ台湾総督府文書を丁寧に読み、丹念に分析していくことの重要性である。台湾総督府文書を活用した研究は、近年、大いに蓄積されつつあるが、膨大な量と内容をもつ台湾総督府文書の中には、まだほとんど分析が行われていない貴重な資料がかなりあるといえる。先述した「撫墾署事務報告」、「蕃人蕃地に関する事務及び情況報告」(弁務署報告)の大部分もその一例である。その意味でも台湾総督府文書のさらなる読解・分析と活用は、植民地統治期の台湾史研究の深化に不可欠であるといえよう。